

「使用上の注意」改訂のお知らせ

三環系抗うつ剤

処方箋医薬品^{注)}

日本薬局方 アミトリプチリン塩酸塩錠

トリプタノール[®]錠 10

トリプタノール[®]錠 25

製造販売元 日 医 工 株 式 会 社

富 山 市 総 曲 輪 1 丁 目 6 番 21

注) 注意－医師等の処方箋により使用すること

この度、上記製品において、「使用上の注意」の一部を改訂（下線部）しましたので、お知らせ申し上げます。今後の弊社製品のご使用に際しましては、下記内容をご高覧くださいますようお願い申し上げます。

<改訂内容> (..... : 自主改訂、 : 削除箇所)

改訂後			改訂前		
10. 相互作用			10. 相互作用		
省略			省略		
10.2 併用注意（併用に注意すること）			10.2 併用注意（併用に注意すること）		
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
アルコール	本剤の作用が増強されることがある。	アルコールが肝での本剤の代謝を阻害し、血中濃度が上昇すると考えられる。	アルコール	本剤の作用が増強されることがある。	アルコールが肝での本剤の代謝を阻害し、血中濃度が上昇すると考えられる。
抗コリン作用を有する薬剤 ブチルスコポラミン臭化物 コハク酸ソリフェナシン トリヘキシフェニジル塩酸塩 等		併用によって受容体部位での抗コリン作用が相加される。	抗コリン作動薬 ブチルスコポラミン臭化物		併用によって受容体部位での抗コリン作用が相加される。
コリン作動薬 ピロカルピン塩酸塩 セビメリン塩酸塩水和物	本剤がこれらの薬剤の作用を減弱することがある。	本剤がこれらの薬剤の作用に拮抗すると考えられる。	コリン作動薬 ピロカルピン塩酸塩	本剤がこれらの薬剤の作用を減弱することがある。	本剤がこれらの薬剤の作用に拮抗すると考えられる。
アドレナリン作動薬 アドレナリン ノルアドレナリン フェニレフリン塩酸塩 等	アドレナリン作動薬の作用が増強されることがある。	三環系抗うつ剤は交感神経末梢へのノルアドレナリンの取り込みを抑制し、受容体のアドレナリン作動性を上昇させ、作用を増強させることがある。	アドレナリン作動薬 アドレナリン ノルアドレナリン	アドレナリン作動薬の作用が増強されることがある。	三環系抗うつ剤は交感神経末梢へのノルアドレナリンの取り込みを抑制し、受容体のアドレナリン作動性を上昇させ、作用を増強させることがある。

<改訂内容> (: 自主改訂、 : 削除箇所)

改訂後			改訂前		
10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）			10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）		
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
オピカボン	血圧上昇等を起こすおそれがある。	オピカボンはノルアドレナリン等のカテコールアミンの代謝を阻害する。本剤はノルアドレナリン取込み阻害作用あるいは放出促進作用を有するため、併用によりノルアドレナリン等の作用を増強させる可能性がある。	←追記		
ドロキシドパ	ドロキシドパの作用が増強され、血圧の異常上昇をきたすことがある。	神経終末でのノルアドレナリンの再吸収が阻害され、ノルアドレナリンの濃度が増加する。			
ゾニサミド	高血圧、失神、不全収縮、発汗、てんかん、動作・精神障害の変化及び筋強剛等の副作用があらわれるおそれがある。	相加・相乗作用によると考えられる。			
ペンタゾシン	本剤の作用が増強され不安感、悪心、発汗、潮紅等が起こるおそれがある。併用が必要な場合には、一方又は両方の投与量を必要に応じて減らすこと。	中枢のセロトニン作動活性を増強すると考えられる。			
メチルチオニウム塩化物水和物	セロトニン症候群があらわれるおそれがある。	メチルチオニウム塩化物水和物のモノアミン酸化酵素阻害作用によりセロトニン作用が増強される。			
三環系抗うつ剤 イミプラミン塩酸塩 クロミプラミン塩酸塩 等 リスデキサメフェタミンメシル酸塩 ラスミジタンコハク酸塩 トラマドール塩酸塩	セロトニン症候群があらわれるおそれがある。	相互にセロトニン作動性が増強される可能性がある。			
トラゾドン塩酸塩	セロトニン症候群があらわれるおそれがある。	機序不明			
中枢神経抑制剤 バルビツール酸誘導体	省略		中枢神経抑制剤 バルビツール酸誘導体	省略	
削除→			降圧剤 グアネチジン硫酸塩 硫酸ベタニジン	降圧剤の作用を減弱することがある。	本剤はアドレナリン作動性神経末でのグアネチジンの取り込みを阻害し、降圧作用を減弱させると考えられている。

<改訂内容> (_____ : 自主改訂、 _____ : 削除箇所)

改訂後		
10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）		
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
スルファメトキサゾール・トリメトプリム	省略	
省略		
クマリン系抗凝血剤 ワルファリンカリウム	省略	
移動→		
血糖降下剤 インスリン 経口血糖降下剤	省略	
省略		
CYP3A4 誘導作用を有する薬剤 カルバマゼピン フェニトイン セイヨウオトギリソウ（St.John's Wort） 含有食品 等	本剤の作用を減弱するおそれがある。	本剤の血中濃度を減少させると考えられる。
CYP3A4 阻害作用を有する薬剤 リトナビル ホスアンブレナビル フルコナゾール 等	本剤の作用を増強するおそれがある。	本剤の血中濃度を増加させると考えられる。
CYP2D6 阻害作用を有する薬剤 選択的セロトニン再取り込み阻害剤 フルボキサミン パロキセチン デュロキセチン 等 抗不整脈剤 キニジン プロパフェノン フレカイニド シメチジン フェノチアジン系製剤 等	本剤の作用を増強するおそれがある。	本剤の血中濃度を増加させると考えられる。
CYP2D6 で代謝される薬剤 ガラントミン アトモキセチン 等	相互に作用が増強するおそれがある。	本剤又はこれらの薬剤の代謝が競合的に阻害される。
リルゾール	リルゾールの作用を増強させる可能性があるため、慎重に投与すること。	本剤がCYP1A2で代謝されることにより、リルゾールの代謝が競合的に阻害される可能性がある。
エチニルエストラジオール メチルフェニデート 塩酸塩	本剤の作用が増強されることがある。	本剤の代謝が阻害されると考えられる。

改訂前		
10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）		
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
スルファメトキサゾール・トリメトプリム	省略	
省略		
クマリン系抗凝血剤 ワルファリンカリウム	省略	
トラマドール塩酸塩	痙攣発作の危険性が増大するとの報告がある。	機序不明
血糖降下剤 インスリン 経口血糖降下剤	省略	
省略		
CYP3A4 誘導作用を有する薬剤等 カルバマゼピン フェニトイン セイヨウオトギリソウ（St.John's Wort） 含有食品	本剤の作用を減弱するおそれがある。	本剤の血中濃度を減少させると考えられる。
CYP3A4 阻害作用を有する薬剤 リトナビル ホスアンブレナビル	本剤の作用を増強するおそれがある。	本剤の血中濃度を増加させると考えられる。
CYP2D6 阻害作用を有する薬剤 選択的セロトニン再取り込み阻害剤 フルボキサミン パロキセチン 抗不整脈剤 キニジン プロパフェノン フレカイニド シメチジン フェノチアジン系製剤	本剤の作用を増強するおそれがある。	本剤の血中濃度を増加させると考えられる。
←追記		

<改訂内容> (: 自主改訂)

改訂後			改訂前
10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）			10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）
薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子	←追記
オキシコドン塩酸塩水和物	麻痺性イレウスに至る重篤な便秘又は尿貯留が起こることがある。	相加的に抗コリン作用を増強させる。	
	呼吸抑制、低血圧及び顕著な鎮静又は昏睡が起こることがある。	相加的に中枢神経抑制作用を増強させる。	
モルヒネ塩酸塩水和物 アヘン コデインリン酸塩水和物 ジヒドロコデインリン酸塩 ヒドロモルフォン塩酸塩 フェンタニルクエン酸塩 ペチジン塩酸塩	呼吸抑制、低血圧及び顕著な鎮静又は昏睡が起こるおそれがある。	相加的に中枢神経抑制作用を増強させる。	
メサドン塩酸塩	不整脈を誘発するおそれがある。	相加的にQT延長作用を増強させる。	
	呼吸抑制、低血圧及び顕著な鎮静又は昏睡が起こるおそれがある。	相加的に中枢神経抑制作用を増強させる。	
ズラノロン	本剤の中枢神経抑制作用が増強されるおそれがある。	相加的に中枢神経抑制作用を増強させる。	
アルテメテル・ルメファントリン	QT延長が起こるおそれがある。	機序不明	
ソタロール塩酸塩 ニフェカラン塩酸塩 モキシフロキサシン塩酸塩（内服） メフロキン塩酸塩 β_2 受容体作動薬 インダカテロール マレイン酸塩 ビランテロールトリフェニル酢酸塩 ホルモテロールフマル酸塩水和物 等	QT間隔が延長され心室性不整脈等のリスクが増大するおそれがある。	いずれもQT間隔を延長させる可能性がある。	
ラベタロール塩酸塩	併用により振戦があらわれやすいとの報告がある。	機序不明	
メタンフェタミン塩酸塩	メタンフェタミン塩酸塩の作用を増強させることがある。	機序不明	
トピラマート	本剤の血中濃度が上昇することがある。	機序不明	
イオフルパン（ ^{123}I ）	本剤との併用により、線条体におけるイオフルパンの集積低下の原因となる可能性がある。画像を評価する際に留意すること。	イオフルパンの線条体における特異的結合を本剤が競合的に阻害する可能性がある。	

<改訂内容> (: 自主改訂)

改訂後				改訂前					
10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）				10.2 併用注意（併用に注意すること）（つづき）					
薬剤名等	臨床症状・措置方法		機序・危険因子	←追記					
イソニアジド	本剤の作用を増強するおそれがある。		機序は明らかではないが、MAO 阻害に関連していると考えられている。						
オリブダーゼ アルファ（遺伝子組換え）	オリブダーゼ アルファ（遺伝子組換え）の作用が減弱する可能性がある。		本剤が酸性スフィンゴミエリナーゼの活性を阻害する可能性がある。						
クロフェダノール塩酸塩	クロフェダノール塩酸塩の作用が増強されることがある。		クロフェダノール塩酸塩は咳中枢に作用し、咳嗽抑制作用を示す。						
プロカルバジン塩酸塩	プロカルバジン塩酸塩を大量投与した場合、本剤の作用を増強するおそれがある。		プロカルバジン塩酸塩は弱い MAO 阻害作用を有するためと考えられている。						
ピコスルファートナトリウム水和物・酸化マグネシウム・無水クエン酸	併用により、水分貯留や電解質異常を起こすおそれがあるため注意すること。		水分貯留及び／又は電解質バランス異常のリスクを増加させる。						
ニトログリセリン（注射剤除く）	血圧低下が増強されることがある。		血圧低下作用が相加的に増強される。						
デスマプレシン酢酸塩水和物	低ナトリウム血症による痙攣発作の報告があるので、血清ナトリウム値等をモニターすること。		抗利尿ホルモンを分泌し、体液貯留のリスクを増すことがある。						
11. 副作用				11. 副作用					
省略				省略					
11.2 その他の副作用				11.2 その他の副作用					
	5%以上	0.1～5%未満	0.1%未満	頻度不明		5%以上	0.1～5%未満	0.1%未満	頻度不明
省略				省略					
過敏症		発疹	蕁麻疹		過敏症		発疹	蕁麻疹	
皮膚				脱毛症	←追記				
血液				白血球減少	血液				白血球減少
省略				省略					

<改訂理由>

- ・10.2 併用注意において相互作用相手薬の使用上の注意との整合を図るため、以下を改訂しました。
 - 抗コリン作動薬から「抗コリン作用を有する薬剤」に変更し、「コハク酸ソリフェナシン、トリヘキシフェニジル塩酸塩 等」を追記
 - コリン作動薬に、「セビメリン塩酸塩水和物」を追記
 - アドレナリン作動薬に、「フェニレフリン塩酸塩 等」を追記
 - 新たに、「オピカポン、ドロキシドパ、ゾニサミド、ペンタゾシン、メチルチオニウム塩化物水和物、三環系抗うつ剤、リスデキサメフェタミンメシル酸塩、ラスミジタンコハク酸塩、トラゾドン塩酸塩、CYP2D6で代謝される薬剤、リルゾール、エチニルエストラジオール、メチルフェニデート塩酸塩、オキシコドン塩酸塩水和物、モルヒネ塩酸塩水和物、アヘン、コデインリン酸塩水和物、ジヒドロコデインリン酸塩、ヒドロモルフォン塩酸塩、フェンタニルクエン酸塩、ペチジン塩酸塩、メサドン塩酸塩、ズラノロン、アルテメテル・ルメファントリン、ソタロール塩酸塩、ニフェカラント塩酸塩、モキシフロキサシン塩酸塩（内服）、メフロキン塩酸塩、 β_2 受容体作動薬、ラベタロール塩酸塩、

メタンフェタミン塩酸塩、トピラマート、イオフルパン (¹²³I)、イソニアジド、オリブダーゼ アルファ (遺伝子組換え)、クロフェダノール塩酸塩、プロカルバジン塩酸塩、ピコスルファートナトリウム水和物・酸化マグネシウム・無水クエン酸、ニトログリセリン (注射剤除く)、デスモプレシン酢酸塩水和物」を追記

-CYP3A4 阻害作用を有する薬剤に「フルコナゾール 等」を追記

-CYP2D6 阻害作用を有する薬剤の選択的セロトニン再取り込み阻害剤に「デュロキセチン 等」を追記

-トラマドール塩酸塩を三環系抗うつ剤、リスデキサメタミンメシル酸塩、ラスミジタンコハク酸塩の項に移動

・製造販売が中止となり、医薬品医療機器総合機構情報提供ホームページより電子添文が削除されたことを受け、**10.2 併用注意**から「降圧剤 (グアネチジン硫酸塩、硫酸ベタニジン)」を削除しました。

・症例集積に基づき、**11.2 その他の副作用**に「皮膚」の項を新設し、「脱毛症」を追記しました。

<GS1 バーコード>

最新の注意事項等情報につきましては、添付文書閲覧アプリ「添文ナビ[®]」で下記 GS1 バーコードを読み取ることで、スマートフォンやタブレット端末でご覧いただけます。

なお、「添文ナビ[®]」アプリにつきましては、ご使用になれる端末に合わせて「App Store」または「Google Play」よりダウンロードしてください。

トリプタノール錠



今回の改訂内容につきましては、日本製薬団体連合会発行の「DRUG SAFETY UPDATE (DSU) 医薬品安全対策情報 No.349」(2026 年 10 月発行)に掲載の予定です。

また、改訂後の電子化された添付文書は医薬品医療機器総合機構ホームページ (<https://www.pmda.go.jp/>) ならびに弊社ホームページ「医療関係者の皆さまへ」(<https://www.nichiiko.co.jp/medicine/>)に掲載されます。